

東海道五十三次

てくてく歩く日帰り一人旅

太田康直

東海道五十三次 一知られざる穴場— その⑦



(歌川広重 金谷宿)

金谷宿（24番目）は、大井川を挟んで島田宿の対岸にあるので、こちら側にも「東海道金谷宿大井川越の囃」という、着物姿の若い女性を乗せた担ぎ棒付きの台座を、数名の川越人足が肩にしている大きな囃板が建っていた。JR金谷駅少し手前で、「遠州金谷宿本陣跡佐塚屋」や「遠州金谷宿本陣跡柏屋」等の標識を見るにつけ、島田宿で駿河の国ともお別れだったんだ、同じ静岡県ながらここ金谷宿からは遠江の国なんだという思いが、川越えの難儀を知らぬ身にも沸々と湧いて来た。昔は島田と金谷は大河を挟んで別の国だったが、今では同じ島田市内だということを、「夢舞

台東海道金谷宿 島田市」の標識で知った。1つの市の中に旧の国が2つある例は、横浜市とここ島田市ぐらいではなかろうか。

柏屋本陣跡を過ぎると、緩やかな登り坂となる。JR金谷駅ガードの入口に「金谷宿一里塚」跡碑。ガードを潜って線路の向こう側に出た正面にあるのが長光寺。境内に、「道のべの權は馬に喰はれけり」の芭蕉句碑。JR金谷駅に隣接して大井川鉄道の金谷駅があり、1日3往復SLが走っている。このSLを利用して寸又峡温泉に旅するのも一興。金嬉老事件で名を馳せた温泉だが、今だに観光俗化しておらず鄙びた風情を楽しめる温泉郷である。

前述の長光寺を後にして急勾配の金谷坂に差しかかる。美しい石畳は地元の人たちの手により平成に入ってから再生されたもの。この石畳道を上りきると広大な茶畑。金谷坂を過ぎると菊川坂石畳。下りきると間の宿菊川。この宿の名物が菜飯であったことを最近、意外にも俳句の本で知った。『食の一句』（權末知子・ふらんす堂）から引用すると、「かつて東海道の菊川では湯通した

葉を煎り、粉にして飯に混ぜたという。菜飯が菊川の名物になったのは、本格的な食事を出すことを禁じられていた間の宿だったから」とある。



(歌川広重 日坂宿)

ここ菊川は、平成 19 年の春の甲子園大会で優勝した私立高校の本拠地でもある。

金谷坂、菊川坂を上り下りして、小夜の中山峠のある日坂宿（25 番目）へと、険しい山道が続く。特に小夜の中山は平安時代以来の最も良く知られた歌枕で史蹟、歌碑、句碑等が数多くある。そんな道を上りつめた峠に建つのが久延寺。関が原に向かう徳川家康を、掛川城主山内一豊がこの寺に茶亭を建ててもてなしたという。このお寺の近くに「小夜の中山公園」があり、入口に西行の「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」の、どでかい歌碑。少し下ると芭蕉の、「馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり」の句碑、これは『野ざらし紀行』中の一句。さらに少し下ると「命なりわづかの笠の下涼み」の同じく芭蕉句碑。この句にちなんでここにある松を、「涼みの松」という。「命なり」に西行の歌を意識した跡がありあり。もう少し下ると「夜泣き石」。明治になって路傍に置き換えられたが、江戸時代は道のど真ん中にでんと据えられていた。広重の「日坂宿」の図にもその通りに描かれている。大名行列も避けて通ったとのこと。名の由来は諸説

紛々。大体の筋は、昔、妊婦が山賊に殺されたがお腹の子は助かり、久延寺の住職が水飴で育てた。殺された母親の霊が石にこもり夜な夜な泣くので読経して慰めたところから、夜泣き石の名がついたという。その縁でか、もう1つの夜泣き石が久延寺の境内にあった。

小夜の中山から七曲りの急坂を下ると日坂宿。日坂宿は JR 東海道線から大きく外れていてひっそりしているが、どの家の前にも宿場町時代の屋号が記されていて、古い面影を残す街並みである。最初に日坂宿の説明板と地図があり、続いて日坂宿本陣扇屋跡。家紋つきの幕が垂らしてあるが現在は幼稚園。続いて日坂宿問屋場跡、日坂宿高札場跡があり、日坂宿下木戸跡で終る。間もなく国道 1 号線と合流。今回歩いた金谷坂、菊川坂、小夜の中山等は丁寧に案内の掲示がされてあって気分が良かったが、次の掛川宿に近づいた途端、宿場への入り方が分からず、1 号線沿いにある掛川警察署に泣きついたが剣もほろろ。夕闇も迫っていたので、とりあえず JR 掛川駅への道を教えてもらってその日の行程を終えた。



(歌川広重 掛川宿)

さて次の回は JR 掛川駅からスタート。駅前タクシーの運転手さんに教えてもらってやっと国道から掛川宿へ入る道に辿りつくことが出来た。参考までに記しておくところには地名の入っていない

い交差点で、強いて目印にするものを挙げると、「二級河川逆川」の標柱を見た所で左折すること。するとほどなく「東海道葛川一里塚跡」の標柱と案内図が出て来る。その先に細い道が榊形に曲がっている「掛川七曲り」があり、そこが掛川宿（26番目）東番所跡、すなわち東の入口である。結果として東海道の遺跡はここだけであった。その先、市の中心を通る商店街が旧道であったが、そこには1つの遺跡も残っていなかった。むしろ民間の清水銀行の建物や、表裏に「両替」、「札差」と記された看板等に雰囲気を感じられた。代わりに時期が大河ドラマ『功名が辻』の始まる直前だったので、「山内一豊ゆかりの地へようこそ」の幟が商店街（東海道）を埋め尽くしていた。城下町兼宿場町として、東海道に冷淡で城に大きな愛着を抱いている例としては、小田原と甲乙つけ難い。珍しい十九首町じゅうくしゅうという地名にもなっている、平将門十九首塚を訪れようと思ったが、何せ東海道に冷淡な掛川ゆえ標識1つなく、入口が分からず散々迷った。将門らの首を京都に運ぶ途中、逆臣の首を御所に近づけてはならぬと、勅使が派遣されこの地で検視の後捨て置かれるところを、将門を討った秀郷の計らいにより築かれ、埋葬された塚である。



お隣同士の宿場ながら東海道に対する態度は両極端。次の袋井宿（27番目）は歩いていても実に気持ちがいい。言うまでもなく東海道には53の宿場があるが、江戸・上方のどちらから数えても27番目が「ど真ん中宿」でそれを名乗れるのは袋井宿しかない。「旧東海道の説明図」板がある所からが袋井宿で、いったん宿に入ると大きな説明図板だけでも、「東海道松並木と三代歌川広重の図（袋井宿）」、「行書東海道（袋井宿）」、「久津部一里塚」、「隷書東海道（袋井宿）」、「袋井宿と天橋」、「此処はどまん中袋井宿」、「袋井宿名所旧跡案内図」、「蔦屋版東海道袋井宿」等が、五十三次中最も短かった（約570メートル）宿場内に目白押しに建っている。中でも庄巻は校門に掲げられた「東海道五十三次 どまん中東小学校」の表札であろう。2行に分ち書きされていて、固有名詞が「どまん中東小学校」なのか、「東海道五十三次どまん中」までが「東小学校」の、名詞でいう肩書きの役目を果たしているのか知る由もないが、地域ぐるみの熱の入れようが分かろうというもの。その他、袋井宿場公園が整備され、市経営の観光案内所兼無料休憩所が駅前ではなく旧道沿いに設置されていて、市の職員のおばさんがお茶を振舞ってくれるのも、有り難かった。